

特集

# 家で看取った<sup>うち</sup>

## “あの人”のこと



かつては当たり前だった「在宅看取り」。

しかし、1970年代以降は、病院での看取りが主流となっていく、多くの人は看取りの経験がないという現実があります。

また、本人は自宅での最期を望んでいても、さまざまな状況が絡み合い、希望どおりとならないこともあります。

「家で看取る<sup>うち</sup>」ということに対して、本人や家族、そしてそれに寄り添う医療者は何を思い・どう考えているのか。

これからの「在宅看取り」を考えるために、それを経験された方々に語っていただき、

そこに現れた思いを共有できたらと、このテーマを企画しました。

応募作には、最後のときを迎える“あの人”の生き様を中心に、その家族や関わる医療者の思いがさまざまに著されていました。

本号では、そのなかから大賞1本のほか、各賞2本、最終選考に残った7本の計10作品を掲載します。

全国から寄せられた“あの人”“その家<sup>うち</sup>”らしい看取りの物語を通じて、

在宅での看取りにまつわる当事者の思いや課題にあらためて向き合ってみる機会になれば幸いです。

